

祝辞 一 百年史への想い

西南学院名誉顧問
寺園 喜基

この度の『西南学院百年史』の発刊に際して、衷心より祝意を表したい。私は西南学院を現職から離れているが、他人事ではなく自分のこととして嬉しく思う。

2004年に私は院長に任じられた。2年後には学院創立90周年を迎えたのだが、その前年に、90周年の迎え方（式典、記念行事等）について教職員にアンケート調査を行った。その結果、ほとんどの人たちが、まもなく100周年が来るのだから静かに、派手にならないようにすべきだという考えを示した。なるほどと思いつつも、私はなんだか釈然としなかった。何故なら現職の人で90周年しか祝えない、100周年を迎えられない人も、私を含めて、たくさんいるということを知っていたからである。それで考えたのが、90周年を派手に祝うのではないが、しかし意義あるものとするのにはどうしたら良いかということだった。

そこで提案したのが90周年は、10年後に100周年を迎えることになる、その最初の第一歩の年であるから、それに相応しい迎え方、その準備をしよう、というものであった。そして100周年を目指していろいろな事業を始めた。例えば、高校生対象の英語スピーチコンテスト（これは数回しか続かなかった）、西南リコーダー・フェスティバル（100周年が終わったのを最後に11回までで終了）、マタイ受難曲を目指す合唱・オーケストラによるコンサート（これは安積音楽主事によって実現）などであるが、中でも百年史の刊行は絶対に仕上げたい事案であった。

しかし常任理事会に百年史の刊行について上程した時、その反応は必ずしも肯定的というわけではなかった。例えば、企業の社史の場合などは専門家に資料を渡して執筆を依頼すればそれで済むのだ、というような発言もあった。それに対して、学院史は自校のアイデンティティー確認のために自分たちで編集・執筆すべきで、他人に任せるべきではないという声も強くあり、この声は結局、多数を得た。それを受けて具体的な歩みとしては、百年史編纂諮問委員会を設け、作業としては『西南学院史紀要』を発行することになった。この委員会は後に百年史編纂準備委員会、百年史編纂委員会と名称を変えて百年史刊行に至る。この間、2010年に百周年事業企画運営委員会を設け、全体的な事業・行事を企画・運営していくことになった。

百年史の前には『西南学院七十年史』上・下という2部からなる大部な学院史がある。しかし歴史の中で最大の出来事であった戦争について、西南学院の責任はどうかとうことは触れられていない。多種にわたる資料や逸話などが集められ、それなりに興味あるものではあるものの、現在の西南学院が創立70年を経て、神の導きと人々の支援によってどんなに立派になったかという感謝と共に自画自賛もしているような調子が響いて来る。編集者の独りよがりな面、資料の扱いの点などでの不備が見られるとともに、特に編集の柱になる観点が明確に見えない。すなわち、被害者意識のみがあって、西南学院の戦争責任・戦後責任が見過ごされているのである。まだそこまで歴史の認識が十分でなかったのかもしれない。その反省を踏まえて、百年史は西南学院の戦争責任・戦後責任を視点において編集するという方針を確認した。

このような方針を受けて、創立100周年を迎える3年前の6月に学徒出陣戦没者追悼記念式を行うことになった。反対の声も、つまり神道式の戦没者慰霊祭と混同されるから反対という声もあったが、学徒兵として戦死した先輩たちをキリストの名において記念することは意味のあることだとして、キリスト教の礼拝形式において挙行了。そしてこの記念式の延長線上で、「西南学院の戦争責任・戦後責任を踏まえて」の平和宣言を創立100周年に際して公表したのであった。

こう見てくると『西南学院百年史』は、西南学院がこれからの100年に向かう歩みに際しても、平和を追い求める学院であることを、内外に表明していると言えるのではないであろうか。